

## ルネサンスにおける「人間の尊厳」について

大貫, 義久

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

(29)

(終了ページ / End Page)

(178)

(発行年 / Year)

2009-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003624>

## ルネサンスにおける「人間の尊厳」について

大貫義久

## はじめに

十四世紀から十五世紀にかけて、ヨーロッパでは、ペストの流行や戦乱や飢饉により多くの死者が出て、社会は危機的な様相を呈していた。この危機の時代に、いままでは「人間への眼差し」がおこった。死者が村や都市にあふれ、画家たちが「死の舞踏」を描き、そして托鉢僧が「死を想え」と説いた、あまりにも悲惨な時代に、「人間の尊厳」が高らかに唱えられたのである。人々は、はかない人間の生に直面し、改めて「人間」を真摯に見つめ、「人間」と「人間の生きる意味」を問わざるを得なかった。中世以来「神への眼差し」が中心であったヨーロッパだからこそ、危機の時代にあつて「人間」へのより強い眼差しがおこった、とも言えよう。つまり、「人間の尊厳」という考えは、ヨーロッパのキリスト教世界で形成され、ルネサンス期に明確に表明されたのである。

「人間の尊厳」についてのルネサンス思想 (Renaissance Idea of the Dignity of Man) という優れた論文を書いたチャールズ・トリンカウスによれば、「人間の尊厳」は、人間が神の像や似姿として神により創造されたというキリスト教の教義に由来し、そしてその教義は歴史上二つの意味に解釈されてきた。その一つは、人間は神の像や似姿という限界を超えて、その像や原型との完全な同化へと進むことによって、究極的に神と化す運命にあると

いう「超越的意味」であり、そしてもう一つは、人間は神に似た仕方でも思考し、感じ、行動しながら、人間よりも下位の自然界を支配し、利用し、指揮し、再編成するという「内在的意味」である。これらのキリスト教の教義に由来する二つの意味を取り入れながら、ルネサンスの思想家たちは、時代の要請に促されて、現実の生活やこの世での業績を積極的に認め、しかも同時にそれらを伝統的な宗教的価値や目的の中に組み込むことで、「人間の尊厳」の新しい考えを提示したのである。

「人間の尊厳」というテーマは、もちろん、ルネサンスに固有のものではなく、すでに中世において「人間の悲惨」と対になって取り上げられており、その後の近代でも主張された。十二世紀にカンタベリーのヘルメルスが『人間の状態の尊厳と悲惨』を著し、同世紀末にはロタリオ・ディ・セニ（のちの教皇インノケンティウス三世）が「人間の尊厳」というテーマを意識しつつ、『現世の蔑視について、あるいは人間の悲惨な境遇についての三卷』(De contemptu mundi sive de miseria conditionis humanae libri tres) を著し、「現世蔑視論」として後世に大きな影響を与えた。そして十七世紀にはパスカルが『パンセ』(Pensées) の中で「人間の悲惨と尊厳」を説いた。それでも小論が、あえてルネサンスにおける「人間の尊厳」に注目するのは、ルネサンス期を生きた人々が苦悩の中で自分自身を真摯に見つめ、新しい人間観を提示したからである。そのことは、確かに、キリスト教世界の一時代の思想的な出来事に過ぎないかもしれないが、しかし今日のわれわれにとっても、なお意味を持ち続ける。なぜなら、この現代という時代は、政治や経済や教育や医療の場面で、人間が、あたかも尊厳などないかのように、ないがしろにされているからである。悲惨な状況ばかりが目につき、人間の尊厳などないかのようなのである。このような時代に、われわれは、ルネサンス人が極度の悲惨の中にあってもなお絶望せずに、あえて「人間の尊厳とは何か」を考え続けたことに注目し、彼らの声に素直に耳を傾けるべきであろう。

以上の考えのもとに、小論は、ルネサンスにおける「人間の尊厳」について考察してゆく。最初に、中世と近代の狭間で苦悩したペトラルカを取り上げる。次に、ペトラルカを引継いだ人文主義者で「人間の尊厳と優越について」(De dignitas et excellentia hominis) を著したジャンノッツォ・マネッティを扱う。そして最後に、

『市民生活論』(*Della vita civile*)で「人間の尊厳」をより具体化したマッテオ・パルミエーリを取り上げ、彼においてペトラルカの苦悩が克服されたことを示し、小論を終える。

### 一 フランチェスコ・ペトラルカ

ペトラルカ(一二〇四—七四)は、特にキケロとアウグスティヌスの影響を受けつつ、当時(十四世紀)のスコラ哲学を批判することを通じて、「人間がこの現実でいかに生きるか」ということを問題にし、その中で「人間の尊厳」を主張する。彼はまず、スコラの論理学を批判する。ペトラルカ自身(フランチェスコ)とアウグスティヌスとの対話形式になっている『わが心の秘めたる戦いについて』(*De secreto conflictu curarum mearum* : 以下、『わが秘密』と略す)の中で、当時の論理学が、以下のように激しく非難される。

アウグスティヌス「論理学者〔スコラ学者〕どものおしゃべりは、とどまることを知らず、細切れの定義で満ちていて、とどめなく議論の種を持ち出せるのが自慢だ。ところが連中は自分たちが議論の対象としている事柄の真理を、たいがい知ってはいない。だから、こういう連中のだれかに向かって、人間その他についての定義を問えば、答えはとつくにできあがっているが、さらに突っ込んで問うて行くと黙り込んでしまうだろう。あるいは議論辯のために饒舌で、心得顔にまくしたてはするが、自分の定義した事柄について真の認識を欠くことは、その話ぶりからしてわかる。こんなわずらわしくも軽率な、浅はかにも物好き、この種の人間どもに対しては、こう罵ってやるのがいいのだ。……かわいそうに、きみたちはなんで、いつまでも無駄骨を折り、むなししい尻にとらえられて、せっかくの才能をすりへらしてしまうのか。なんで、事柄を忘れて、ことばの間で老い朽ち、白髪頭にしわだらけの顔をして、なおも子どもっぽい、つまらんことにかかずらっているのか」。フランチェスコ「ほんとうに、こんな学問のお化けに対しては、どれほど酷評しても酷評し足りません」。

『わが秘密』第一卷<sup>(2)</sup>

当時の論理学を、ペトラルカは、事柄そのものの真理の探究を目指さず、議論のための議論に終始している「学問のお化け」と酷評する。

さらにペトラルカは、「自分自身（心魂）」を問題にしない当時の自然学者を、以下のように言って非難する。

アウグスティヌス「どれほどたくさんを知り、天地の大きさ、海の広さ、天体の運行、草木や石のはたらき、自然の秘密などを知ったとしても、きみたち自身に無知だとすれば、それが何になるう」。『わが秘密』第二卷)

そしてペトラルカの眼差しは、外の自然世界よりも内なる心魂に向けられる。それはアウグスティヌスの『告白』との出会いによる回心であった。

これらの（右手のリヨン地方の山々、左手のマルセイユの海や、エーグ・モルトの岸辺に打ち寄せる白波、そしてローヌ川の流れといった景観の）一つひとつに感嘆しながら、あるいは地上のものに嘆賞しているうちに、私はアウグスティヌスの『告白』を読んでみたくまりました。……私は、どこでも目に入ったところを読むつもりでその書を開きました。……私の目に入ったのは、たまたま同書の第十巻でした。「人々は外に出て、山の高い頂き、海の巨大な波浪、河川の広大な流れ、荒蕪たる海原、星々の運行などに感嘆し、自己自身のこと、は、なおざりにしている」。私は愕然としました。……心魂の他には何ら感嘆すべきものはなく、心魂の偉大さに比べれば何ものも偉大ではないこと、このことを私は異教の哲学者（ローマのキケロやセネカ）たちからさえも、とつくに学んでおくべきであったのに、いまなお地上のものに感嘆している、そういう自分が腹立た

しかったのです。(『親近書簡集』*Rerum familiarium libri*：第四卷<sup>(3)</sup>)

心魂へと眼差しを向けるペトラルカは、自然を知ることよりも、「私がいかに善く生きるか」を知ることの方を重視する。

医者のグイド・バニョーロは確かに野獸や鳥や魚について、たくさんのことを知っています。……彼の知っていることは、その大部分が偽りです。……たとえほんとうだったとしても、幸福な生活とは何の関わりもありません。思うに、人間の本性はいかなるものか、何のためにわれわれは生まれたのか、どこから来て、どこへ行くのか、ということを知らず、その問をなおざりにしておいて、野獸や鳥や魚や蛇の性質を知ったとしても、それがいったい何の役に立つのでしょうか。(『自分と他の多くの者の無知について』*De sui ipsius et multorum ignorantia*：以下『無知について』と略す<sup>(4)</sup>)

ペトラルカは、幸福な生活(言い換えれば善く生きること)に何ら関わりのない当時の自然学を批判し、いかに善く生きるかに関わる道徳哲学を重視する。それは、アリストテレスを哲学の権威として、難しい用語で抽象的な議論をしていた大学の学者たちのスコラ哲学に対して、現実の人生に立脚した哲学を掲げる「哲学の再考」である。ペトラルカは、当時の大学の哲学者たちの研究が、人々の道徳的及び精神的苦悩と結び付いていないことを非難したのである。このペトラルカの実人生への眼差しには、彼自身の生い立ちが影を落としている。ペトラルカの父親は政争に敗れ、フィレンツェを追われ、一家は放浪の亡命生活をよぎなくされ、その亡命先でペトラルカは生を受けたのである。

私は、放浪のうちに生まれ、放浪のうちに生まれました。その際、母は、たいへんな苦痛と危険にさらされ、

産婆たちも医師たちも、とうてい母は助かるまいと思ったほどでした。こうして私は、まだ生まれ落ちぬ前から危険を冒し始めたのであり、死の予兆とともに人生のしきいをまたいだのです。(『親近書簡集』第一巻)

そして、やはりベストの影もある。ペトラルカは以下のように語る。

寺院は死者の棺で雑踏し、悲嘆のうめきにみちる。屍体はあわれにも貴賤の別なく一面に散らばる。私は心わが死を思い、自分の不幸を思い出す。……自分はずねづね死についての省察を怠らず、死の断末魔にも平静に直面できる——こう思うのは誤りだ。あるいは気違い沙汰か自信過剰だ。しばしば真摯高邁な怒りの念や正しい苦痛の思いが、私の柔軟な心をひたし、内と外で私とたたかう。私はあきらかな理性の光に導かれるが、衝動が理性にうちかち、まじめな意図をさまたげる。(『韻文書簡集』*Epistolae metricae*：第一巻一四)<sup>(5)</sup>

このような危機の時代における人々の苦しみに向き合わない学校哲学にペトラルカは批判の目を向けたのである。そしてまたペトラルカは、アリストテレスを絶対視し権威とする当時の学校哲学者たちの態度を批判して、アリストテレスを歴史の中で生きた人間としてとらえる。

アリストテレスは、確かに学識豊かな偉大な人間ではありましたが、しかし一人の人間だったのです。(『無知について』)

ペトラルカはアリストテレスを、現実の生きた生身の人間とする。アリストテレスもまた歴史の中に生き、弱さを持ち、悩みを抱えたわれわれと同じ人間なのである。人間を現実に生きる具体的な一人の人間(実存)としてとらえるペトラルカの見方は、彼よりも九歳年下のボッカッチョにも見られる。ボッカッチョは『デカメロン』にお

いて、その序文でペストの惨禍を述べた上で、本文において、様々な階層に属する生身の人間の生と性をイタリヤ語で赤裸々に描いた。

こうして、現実においていかに善く生きるかということを重視するペトルルカの視線は外なる自然の世界から自身の内へと向けられた。心魂のあり方と、その心魂から出る言葉のあり方、心魂の世話と言葉の世話が、ペトルルカにとって重要であった。それは、道徳哲学と修辭学の重視である。

心魂の世話は哲学者を求め、言葉の世話は弁論家に固有の仕事です。……心魂の世話という問題は重大で、益するところは大きいとは言え、多大の苦勞をとまなうものです。……言葉は生き生きと心魂を告げ知らせ、心魂は言葉を操ります。……言葉は心魂の意向に従い、心魂は言葉の証言によって信じられるのです。だから心魂と言葉の両方の世話がなされなければなりません。……心魂の世話がよくなされている場合には、言葉もおざりにされていないし、また逆に、心魂に威厳が備わっていないければ、言葉に品位が備わるはずがありません。……たとえわれわれ自身は雄弁を必要とせず、われわれの精神が自力で沈黙のうちにその能力を伸ばし、言葉の助けを必要としないとしても、われわれは少なくとも、共に暮らしている人々に役立つよう努力するべきでしょう。実際、われわれの語りかけによって、彼らの心を大いに助け励まし得ることは疑えません。……現代においても、どんなに多くの人が、話し手の示す実例には何の感銘も受けなかったのに、ただ他者の言葉だけで、いわば眠りから呼び覚まされ、極悪非道な生の道から急に、極めて節度ある生き方へと回心させられたことでしょうか！ 『親近書簡集』第一卷九)

ここに見られるように、ペトルルカの道徳哲学は自己だけでなく他者をも視野に入れていた。それは他者の尊重であり、のちの人文主義が大切にした「社会性」を先通りしている。当時の論理学や自然学を批判し、現実においていかに善く生きるかを問題にする道徳哲学と、言葉によって他者の意志に働きかけ善く生きるよう促す修辭学と

を重視したペトラルカは、その眼差しを、当時の社会生活としての行動的生活に向けている。彼の眼差しは、明らかに中世とは異なったものである。

当時の自然研究に対するペトラルカの批判はまた、信仰の問題と連なっている。自然の秘密、さらには深い神の神秘までも理性的に知ろうとしている当時の神学に対して批判し、神への愛としての真の信仰を、ペトラルカは、以下のように強調する。

自然の秘密、それにもまして深い神の神秘、それらをわたしたちは謙虚な信仰をもって受け取るのですが、連中（スコラ学者）はおこがましくも把握しようと努めるのです。ところが、ローマ人に与えた使徒パウロの言葉にも「主の心を誰が知っただろう？ 誰が主の諮問にあずかっただろう？」とある通り、そんなことは事柄自体として不可能なのですが、この事実も連中をこうした狂気から引き戻すには足りないのです。（『無知について』）

さらにペトラルカは、次のように主張して神学者を非難する。

神学者どもは、全能きわまりない神威を空虚な詭弁であれこれと定義し、また神を弄び、笑いものにして、自分たちのとんだ愚昧さの法則に神をおしつけているのだ。（『順逆二境への対処法』 *De remediis utriusque fortune*）

有限な人間が、どうして全能の神を知ることができるだろうか。ペトラルカはキリスト教の真の信仰を求めていた。

もしも哲学者たちがそんなこと〔至福に導く真の信仰 *vera ac beatifica fides* に反すること〕を試みるなら、プラトンやアリストテレスであれ、ヴァッローやキケロであれ、かれらをみな容赦なく徹底的に軽蔑し踏みにじるべきです。いかなる議論の鋭さ、表現の優美さ、名前の権威にも動かされてはなりません。かれらは人間だったのです。……要するに私たちは、哲学という名の含意しているとおり、知恵を愛する仕方で哲学すべきなのです。ところで、神の真の知恵はキリストにほかなりません。私たちは真に哲学するためには、まず何よりも、キリストを愛し、あがめるべきなのです。私たちはすべてに、何よりもまずキリスト者であるように心がけたいものです。心の耳にいつもキリストの福音が鳴り響いているような仕方で、哲学書や詩や歴史書を読むべきでしょう。〔『親近書簡集』第六巻二〕

このように、ペトラルカにとって、哲学すなわち「知恵を愛すること」は、真の知恵であるキリストを愛することであり、これに反することは本来の哲学ではないのである。このペトラルカの哲学観は、アウグスティヌスの『告白』との出会いを通じて起こった宗教心の目覚めと、それまでの聖職者としての自分の生き方に対する深い反省を、その出発点とする。だから、このペトラルカの立場は「キリスト教的ヒューマニズム」と呼ばれるのである。ところで、ペトラルカにとって、人間が善く生きるということは、人間が人間の卓越性（真に人間たるゆえんのもの）を現実化すること、すなわち人間形成の問題でもあった。この「人間の卓越性」を、ペトラルカは、動物性と比較して、次のように強調している。

人間というものは、もしも……人間性 (*humanitas*) をまとい、動物性 (*feritas*) を脱ぎ捨てること、要するに、単なる人間 (*homo*) から人間的人間 (*vir*) になることを学ばないのであれば、ただ卑しい醜悪な動物であるばかりか……有害できまぐれな、不誠実で無節操な、凶暴で残忍な動物でもあるのです。〔孤独な生活について』 *De vita solitaria*〕<sup>(7)</sup>

さらにペトラルカは、人間の卓越性を以下のように説明する。

スキピオは人々のうちで、最も公正にして、最も温和であり、その「生き方の甘味さ」、心の広さと思いやり、そして信仰も、武勇に劣らなかった。〔『有名人伝』*De viris illustribus*〕<sup>(8)</sup>

ペトラルカによれば、人間の動物性は、きまぐれ、不誠実さ、無節操さ、凶暴さ、残忍さであり、人間の卓越性は、公正さ、温和さ、心の広さや思いやり、そして信仰心である。人間は、不誠実さや残忍さなどの動物性（単なる人間）から公正さや寛大さや信仰などの真の人間性を持つ人間（人間的人間）になることを学ばなければならぬ。そしてペトラルカは、ここでも他者を視野に入れて、最も人間に相応しく神に似たこととして他者を救い助けることを挙げる。

できるだけ多くの人々を救い助けることほど、幸福なことがあるでしょうか。これほど人間に相応しく、また神に似たことがあるでしょうか。これをなしうるのになさくないのは、人間性の高貴な義務をなおざりにすることであり、それゆえにまた人間の名と本性を放棄することだと思われます。〔『孤独な生活について』〕

このような高貴な人間性をも持つ人間になることは、人間形成にほかならない。ペトラルカにとっての人間形成は、神にも似た高貴な人間性を持った「善い人間」になることであった。彼は次のように言う。

神よ、あなたはご存知ですか、……私が文学（*litterae*：学識）を慎重に用いたときには、「善い人間」になることだけしか求めませんでした。……若さのあまり、また名譽欲のあまり、……善い人間であることよりも「知的教養の人」であることを望んだようなことはありませんでした。いや実は、その両方を欲していました。

## 『無知について』

この人間の卓越性を実現し、善き人間となることが、ペトラルカにおける「人間の尊厳」である。そして善き人間は、すでに見たように、キリストへの真の信仰者でもあった。しかしペトラルカは他方で、世俗の名誉欲（文学的栄光）としての「知的教養の人」も捨て切れないこと、善い人間と知的教養人の両方を欲していることを、素直に告白している。彼において、事はそれほど単純ではなかったのであり、ペトラルカは心の中に葛藤を抱えていたのである。

私の意志は揺れ動き、願望は一致せず、そして一致しないままに私を引き裂くのです。（『親近書簡集』第二巻）

そのペトラルカの心情を『わが秘密』が語っている。すでに引用した『わが秘密』は、人生のいくつかの出来事により精神的危機に陥ったペトラルカが、これまでの自分の生き方を根本から反省し苦惱しつつ、公表するつもりなく書いたものである。『わが秘密』は、真理の女神を前にして、アウグスティヌスとペトラルカが対話するという形式で書かれており、真理の女神を前にしての対話であることや、公表するつもりはなかったことなどから考えて、ペトラルカが心の内を偽りなく語った著作であることは、間違いない。ペトラルカの対話者アウグスティヌスは、「自分がいかに悲惨であるかの完全な認識が、立ち上がろうとする完全な熟望を生み出す」と言い、深く死を省察して天上的なものを目指し心魂を高めることをペトラルカに勧める。アウグスティヌスに従えば、この地上には人間の尊厳ある生はあり得ないのである。このアウグスティヌスは、中世以来の（前述のロタリオに代表される）「現世蔑視論」を主張している。

アウグスティヌス「わたしはたびたび言った。きみがペンを取るのを見た当初から予告した。人生は不確かだ

が、苦勞は長く確實であり、だから作品の成果は乏しいだろうと。しかし、きみの耳は大衆の声に聳されて、驚いたことにきみは大衆の声を憎みながらも、それに従っていたのだ。〔わが秘密〕

これに対し、ペトラルカは、「自分は人間の名誉だけで充分だ。死すべき人間として、滅ぶべき人間的なものしか求めない」(第三卷)と言ひ、アウグスティヌスに抵抗するが、しかし抵抗しきれない。ペトラルカは、アウグスティヌスの勧めを完全には捨てきれず、ただ後回しにするだけなのである。

フランチェスコ「……しかしいま、あなたがたの住みかは天ですが、わたしはまだ地上の居住が終わっていません。……できるだけ自分自身のことには気を配りましょう。わたしの心魂のばらばらの断片を集め、注意深くわたし自身のもとに留まりましょう。しかしいま、わたしたちが話し合っている間にも、やはり世俗的とは言え、重要な多くの仕事はわたしを待っています」。

アウグスティヌス「俗衆には恐らくもっと重要と思われるものがあるだろうが、ほんとうはこれ〔自分自身の心魂に深く目を向ける観想〕ほど有益なものはないし、これほど省察の成果が望めるものはない」

フランチェスコ「ほんとうにそう思います。いまは急いで他の世俗的な仕事に打ち込みますが、そうするのは他でもなく、それらの仕事を片付けてから、この問題〔自分自身の心魂への観想〕に立ちかえるためです。……この問題ひとつに専念し、寄り道せずに救いへの正しい道を辿る方が、遥かに安全であろうことは分かっています。でも〔世俗への〕願望をおさえつけることができないのです」。

ペトラルカは人間の尊厳ある生をこの現実の世で実現しようとする。しかし、彼は、自身のなお中世的なキリスト教的世界観に引張られ、挫折する。すでにアウグスティヌスは、「きみは大衆の声を憎みながらも、それに従っていた」と言ひ、ペトラルカの心の内なる矛盾を暴いていた。この心の葛藤は、『親近書簡集』でも、以下のよう

に吐露されている。

私を完全に所有し、反対者のないままに私の心の深奥を一人わがもの顔に支配していた、あの倒錯した邪悪な意志 (*voluntas perversa et nequam*) が、反逆的で服従しない別の意志に出会い始めてから、また三年と経っていない。この二つの意志の間では、すでに久しく、そしていまなお私の思想の戦場で、内なる二人の人間の支配をめぐる、いつ果てるともない苦しい戦いが行われているのだ。(第四卷)

倒錯した邪悪な意志はまた、「外なる人間 (*homo exterior*)」と呼ばれ、世俗的な生き方をしようとする意志であり、そしてその意志に反逆する別な意志は、新しい意志として「内なる人間 (*homo interior*)」と呼ばれ、修道院の観想的生活をしようとする意志である(『親近書簡集』第二卷九)。この後者の意志は、アウグスティヌスの『告白』との出会いによって引き起こされたのである。

ペトラルカは、『わが秘密』の中でアウグスティヌスの主張に同調していることや、また『親近書簡集』(第十卷三)において自分の生活と弟ゲラルドの修道院生活とを対比し、一貫して修道院(宗教的)生活を賛美していることに見られるように、頭では「宗教的生活」(天上の神)を求め「中世的」であるが、しかし心情的には「世俗的生活」(地上の個物)に執着せざるを得ず、その点では人間に身近なものを求め「近代的」である。この世俗への関心は、十四世紀においてはペトラルカ一人のものでなく、中世末期の西ヨーロッパの政治的、経済的、社会的活動の拡大(商工業の活発化・都市の繁栄・物質的な豊かさなど)とともに台頭してきた当時の風潮である。だからむしろ、ペトラルカは、その風潮と中世以来の「現世蔑視論」との対立を逸早くとらえ、キリスト教徒として苦悩した、と言った方がよい。彼はどちらかの生活を選択することができず、二つの狭間で苦悩したのである。中世人であれば、「現世蔑視論」から、この世での生活はあの世での至福の準備であり、悲惨以外の何ものでもあり得ず、尊厳はあの世でしか実現され得ないのであるから、ペトラルカのような苦悩は起り得ない。中世人と異なりペト

ラルカは、この世に立脚点があり、この世の様々なものに魅せられている。ペトラルカは、あの世でだけでなく現実の世でも人間の尊敬を実現したいと欲している。しかし、『わが秘密』の中でアウグスティヌスに代弁させた「現世蔑視論」に引張られているペトラルカには、それができない。こうして、現実の世での人間の尊敬は、次世代の人文主義者たちに託されたのである。

## 二 ジャンノッツォ・マネッティ

「人間の尊敬」の問題を積極的に取り上げた人文主義者は、ジャンノッツォ・マネッティ（一三九六—一四五九）である。彼は、中世以来の「現世蔑視論」と対決した。この「現世蔑視論」は、ペトラルカの『わが秘密』におけるアウグスティヌスが代弁していた。このアウグスティヌスは、この世の人間の生を悲惨な状態とし、あの世において尊敬が実現されると主張した。十二世紀末には、前述の助祭ロタリオ（のちの教皇インノケンティウス三世）が、後世に大きな影響を与えることになった『現世の蔑視について』、あるいは人間の悲惨な境遇について（以下『人間の悲惨』と略す）を著し、「現世蔑視論」を強調した。しかしロタリオは、この著作の序文で「人間の諸悪の中でも最高の悪徳である傲慢さを戒めるために、この『人間の悲惨』という書を著したが、次の書では、謙虚な人間が称賛されるために、人間の尊敬についての書を著すつもりだ」と述べている。しかし、この人間の尊敬についての次の書は、実際には著されなかったため、人間の悲惨についての書だけが有名になり、後世に「現世蔑視論」として大きな影響を与えることになったのである。本来ならば、「人間の悲惨」と「人間の尊敬」は対になるテーマであった。

この著作『人間の悲惨』の第一部は、「人間の悲惨について」というテーマから始まる。ロタリオは次のように言う。

人間は何から造られ、人間は何をすべきか、そして人間はどうなるのか、と私は涙ながらに考える。確かに、人間は土から創られ、罪の中で孕まれ、苦しむために生まれてきた。人間は許されぬ不正を犯し、見苦しい下品なことや、無益で浅はかなことを行う。……人間は苦勞、恐怖、悲嘆に苛まれるために生まれ、さらに悲しいことに、死ぬために生まれたのである。

さらに、第七章「裸身について」では、「人は裸で生まれ、裸で根元に帰る。彼は貧しい身で来て、貧しい身で去る。……しかし、何か身に纏って生まれて来る者がいれば、彼は、いかなる衣を纏っているかに気づくがよい。それは、言うも憚る、聞くはさらにおぞましく、見るはこの上なく忌まわしいもの、即ち、血染めの汚れた肌である」と主張され、人間の裸身を嫌悪している。また第十章「人間の勞苦について」では、「小鳥は飛ぶために生まれ、人間は苦勞するために生まれて来る」、「人間の全生涯は日々苦役と悲慘に満ちていて、その心は夜通し安らぐことはない」と『ヨブ記』や『コヘレトの言葉』が引用され、人生そのものが苦痛と悲慘に満ちていることが述べられる。ロタリオによれば、現世において人間はあまりにも悲惨なのである。

マネッティは、この説を反駁しようとしたのである。マネッティは、特にロタリオの「人間の悲慘」についての書に対抗して『人間の尊嚴と優越について』を著した<sup>10</sup>。その書の第四卷においてマネッティは、死の贊美や死の善なることについて、さらには人生の悲慘について、古代から書かれてきた事柄を反駁するために、順に、人体の虚弱なこと、心魂の卑しさ、そして人間の全人格のそれぞれについて、古代からの考えが自分の考えと対立することを明瞭にする。

まず人体に関しては、マネッティによれば、全能の神によって泥から創られた人体は、もし最初の人間が罪を犯したのなら、人体の一部は死すべきものとなったし、もし彼が罪を犯さなかったならば、人体の一部は不滅なものとなり得たであろう。最初の人間の最初の状態においては、彼がそう望めば死ぬことなどあり得なかったという仕方によって創られた。ところが第二の状態において、人間は罪を犯すことで死の掟を招き寄せるまでに墮落

し衰弱してしまった。しかし栄光ある復活という第三の状態においては、人間は神の恩寵によって死ぬことがあり得ないようなものとなる。それゆえ、身体のある虚弱や病氣や不都合も、人間の本性によってではなく、むしろ罪の汚れによって引き起こされたのである。われわれの日常生活においては、わずらわしいことよりも快樂的な事柄の方が多い。身体の諸感覚をほどよく適度に用いるときには、われわれはただ疲労したり苦勞したりしないばかりか、むしろ元気を回復し、喜び楽しむのである。このわれわれの身体は、それが泥という最低の物質でできているとしても、人間の心魂の、価値ある優れた容器に相応しく、他の動物の身体よりも遥かに高貴なのである。

また心魂に関して、心魂を身体的で物質的な卑しいものだと言張る者たちに対して、マネッティは、「自然物にはない記憶や精神や思考の力を持つ心魂の起源は地上には全くなく、それゆえに天的な神的なもので、アリストテレスの第五の自然（エンテレケイア）からなる永遠的なものだ」というキケロの言葉を、「真理そのもの及びカトリックのキリスト教信仰とこの上なく一致するものだ」と主張する。

さらに人間の全人格（死の讚美）に関して、マネッティは、カトリックの正統的な見解によって古代の異教徒の説を以下のように反駁する。

聖書が証するように、神によって創造されたものはすべてきわめて善である。……人間のためにすべてのものがきわめて善なるものとして、また最善なるものとして創られたとされているその人間は確かに、ただ単に最善な者であるのみならず、また言わば、最善以上のものである。……それゆえ、人生は、一般に悲惨ではあり得ないし、あるいは悲惨とはなり得ない」。

ここには、ルネサンスに特有の人間中心の考え方と「現世における人間の生」の積極的な肯定が見て取れる。ただ、ルネサンスにおける人間中心の考えは、神あつてのものであり、今日の神なき人間中心主義とは異なる。

そしてマネッティによれば、聖アンブロシウスや教会の他の博士たちが死を讚美したのは、「身体から分離され

た善良な心魂の祝福された幸福な来世のために、また新たな復活後の人体の素晴らしい、ほとんど信じ難い栄光のためにであった。

次に、マネットィの筆はロタリオ(教皇インノケンティウス三世)の説を反駁することへと移る。マネットィは、人間の悲惨な境遇の強固な根拠が人間の誕生にあるとしたインノケンティウスが以下のような主張をするとき、彼の根拠を軽薄で幼稚だ、と非難する。インノケンティウスは次のように主張する。

われわれはみな、人の世の悲惨さを示すために、泣き叫びながら生まれる。生まれたての男の子はアアと嘆き、女の子はエイと悲しむ。アアとかエイとか嘆き悲しみ、すべての人々はエヴァから生まれる。ではエヴァとは何であろうか。それは悲痛の大きさを示す、悲嘆者の感嘆詞である。したがって、彼女は罪を犯す前は乙女の勇者(Virago)、罪の後は「エヴァ」と呼ばれるにふさわしい。

この主張に対して、マネットィは、聖書のヘブライ語からの理解に基づき、エヴァとは「すべての人間の母」の意味であり、Viragoとは「vir(男)から派生したVirago(女)」であるとして、インノケンティウスの根拠が軽薄で幼稚だと、反論するのである。そしてさらにマネットィは、裸体、人間から生じる物、人生の短さ、そして死すべき者の労苦のそれぞれについて、インノケンティウスの説をことごとく反駁する。つまりマネットィによれば、人間が裸で生まれ、裸で元に返るのは、インノケンティウスが言うような「貧しい身」ということでなく、「人間の裸身が優美であるから、このように生まれて来たのである」。この「人間の裸身を優美とする」考えこそ、ルネサンスの画家に、躊躇うことなく、中世のような衣を纏った三美神でなく、裸身に優雅に輪舞する三美神を描かせたものであろう。また、マネットィによれば、人間の生み出す物は、不潔で醜悪なもの(インノケンティウスが言う痰や糞尿)でなく、「理解したり行動したりする多様な働きである」。人生の短さについては、「理解したり行為したりする」といわれわれの固有の責務のためには、また善く幸福に生きるためには、これまでの、そしていまの

人生の長さで十分である」。死すべき者の労苦については、「労苦よりも遥かに多くの楽しみが、行動したり労働したりする人間の活動によってわれわれに生じる。……われわれは活動している間に常に少しばかり苦勞するけれども、同時にまたわれわれのあらゆる活動において、われわれは一層激しく楽しむことも確かである」。つまり、この現実において人間は悲惨ではないのである。そして人間の不幸について新たに述べられ得る他のすべてのことも、われわれの肉体の新たな復活という（死後に起こる）ことによって、容易に打ち破られるのである。「われわれがよみがえるであろうときには、死んだ肉体を、何らの汚れも、何らの腐敗も、何らの虚弱も、何らの歪みもなく、この上ない栄光においてよみがえったものとして取り戻すであろう」。そこには、永遠の健康、老いることのない青春、肉体の自由、汚れのない美しさ、非受苦性と不滅性、間断なき平安、永遠の喜びが、あるからである。こうして、死後のことをもふまえた上で、人間の肉体の尊厳がどれほど素晴らしいものであるか、その心魂がどれほど気高く崇高なものであるか、さらに二つの部分の組み合わされた人間そのものの卓越はどれほど優れたものであるかということ、十分詳細に説明したとし、最後にマネッティは、「神の戒めの各々をすべて守り実行するよう心がければ、現世の特典と、この世とあの世との永遠の褒賞を得るであろう」と結論する。

以上、見てきたことから、以下のことが言えよう。すなわち、教皇インノケンティウス三世によれば、人間は様々な側面から現実の人生そのものが悲惨であり、人間の尊厳は、それについて彼は書かなかったが、あえて言えば、死後、選ばれた人により天国でのみ実現される。これに対して、マネッティは、われわれ人間の肉体や魂の、そしてそれら二つの部分から成る人間そのものの卓越性を認め、この現実においても人間の尊厳が実現されることを強調する。キリスト教徒としてのマネッティは、各々の人間がその能力に応じて神の戒めを守り実行すれば、この世でもあの世でも尊厳が実現されると結論する。

『人間の尊厳と優越について』を読む限りでは、マネッティにとって人間の悲惨は、インノケンティウスとは逆に、この世にはなく、むしろあの世にある。マネッティは、古代の異教の思想家の説やキリスト教自体の説に基づき、現世における人間の生を積極的に肯定し、「神により人間のために最善なもの（自然世界）が創られたとされ

るその人間は、最善以上のものであるから、人生は悲惨にはなり得ない」と喝破する。しかし、この現実において人間は悲惨にならないだけであって、そのままで尊厳が実現されているわけではない。各人がその能力に応じて神の戒めを守り実行しなければ、尊厳は実現されないのである。このことは意志や行為の問題に関わるであろう。

人間性を信頼し、現実の生活を重視するのは、人文主義の特徴である。その特徴は、マネッティよりも十歳年下のマッテオ・パルミエーリ（一四〇六―七五）の『市民生活論』において、さらに具体化される。次に、このパルミエーリの思想を見てみよう。

### 三 マッテオ・パルミエーリ

パルミエーリの『市民生活論』は、彼が二十歳代のときに書いた作品であり、全部で四巻から成る。その第一巻では、児童の年齢に応じた教育論と、人間形成、そして市民の正しい生き方の問題が論じられ、第二巻と第三巻では、「行為の正しさ *onestà*」に関わる四つの徳が、つまり思慮・勇氣・節制・正義が、論じられ、そして最後の第四巻では、「有用性 *utilità*」の問題が論じられている。この『市民生活論』において、パルミエーリは人間の尊厳を、この現実の市民社会において「善き市民」として生きることに見出した。パルミエーリは次のように主張する。

孤独生活（地上的なものを軽蔑し、天上的なものの観想のみを行う生活）は市民生活の下位にあり、……従って、この地上でなされることのうち、もっとも神の御心にかない喜ばれるのは、多くの人々が正義を絆として一つに結ばれ合って生きる国家社会を、正しく統べ治めることにほかなりません。ですから、都市の正しい統治者や祖国の護持者たちに対して、神は天上に一定の場所を約束しておられるのであり、彼らはそこで聖者たちとともに永遠に祝福されて生きるのです。（第一巻）<sup>(1)</sup>

パルミエーリにおいては、ペトラルカが賛美し続けた「修道院生活」が「公共の活動から退いて孤独のうちに生き、自分自身の救いにのみ意を用い、他の人々との共同生活には何の役にも立たない孤独生活」として徹底的に批判され、現実の市民社会での生活が讃美されている。すなわち、現実の市民社会において善き市民として生きることが「人間の尊厳」の実現であり、それはまた同時に神の御心になかった神的事柄でもある。こうしてパルミエーリにおいて、この現実世界で、地上的(人間的)なものと天上的(神的)なものと、ペトラルカが達成できなかった融和が実現されたのである。もちろん、このパルミエーリの考えの背景には、一四世紀末から一五世紀初めにかけて自国の自由を守るためにミラノやナポリと戦い共和政を築いたフィレンツェの歴史がある。そしてパルミエーリの言う「市民」とは、祖国の統治者であり、それは、当時のフィレンツェ社会においては大アルテ(組合)に属するごく一部の者たちであったことも忘れてはならない。そして、この「善き市民」としての統治者は、パルミエーリによれば、「人間精神の普遍性」を自覚して人間的諸能力を全面的に発達させ、より多くの人間的活動に適した「普通人」へと絶えず自己形成する人間でもあった。だからまたパルミエーリにとって、人間の高貴さを決めるのは、もはや古い封建的な身分や家柄ではなく、むしろ絶え間ない自己形成の努力なのである。

以上見てきたように、人文主義者マネッティは、ペトラルカを引き継ぎながらも、現世(現実)を蔑視せず、むしろ積極的に肯定し、善きキリスト教徒として現実を生きることによって、この現実でも「人間の尊厳」が実現されることを主張した。そして青年パルミエーリは、フィレンツェ社会の動向を背景にして、この現実の市民社会において善き市民として生きることが「人間の尊厳」であり、それが人間の本性にも神の御心にもかなった生き方であることを明らかにし、ペトラルカの苦悩を克服したのである。

## 《注》

- (1) C. Trinkaus, *Renaissance Idea of the Dignity of Man*, in *Dictionary of the History of Ideas*. (New York, 1973), p. 144.  
『ルネサンスと人文主義』(平凡社・一九八七年・一一二—一四頁)
- (2) F. Petrarca, *De secreto confictu curarum mearum*, in F. Petrarca: *Prose*, a cura di P. G. Ricci-E. Carrara-E. Bianchi,

- Milano-Napoli, 1955, pp. 21-215. 訳文については『ペトルルカ』わが秘密』近藤恒一訳(岩波文庫・一九九六年)に従った。
- (3) F. Petrarca, *Familiarium rerum libri*, edizione critica per cura di V. Rossi e Bosco, 4 voll., Firenze, 1933-42. 訳文に「*in quibusdam*」ペトルルカ『ルネサンス書簡集』近藤恒一訳(岩波文庫・一九八九年)に従った。
- (4) F. Petrarca, *De sui ipsius et multorum ignorantia*, in *Opere latine cilt.*, pp. 1025-1151. 訳文については、近藤恒一『ペトルルカ研究』(創文社・一九八四年)を参考にした。
- (5) F. Petrarca, *Espositae metricae*, in F. Petrarca: *Rime, Tronfi e poesie latine*, a cura di F. Neri G. Martellotti-F. Bianchi-N. Sapegno, Milano-Napoli, 1951, pp. 705-805. ペトルルカ『ルネサンス書簡集』近藤訳、二〇二—二二二頁。
- (6) F. Petrarca, *De remediis utriusque fortune*. 近藤恒一、前掲書、四〇—四三頁。
- (7) F. Petrarca, *De vita solitaria*, in *Prose*, cit., pp. 285-591.
- (8) F. Petrarca, *De vitis illustribus*, ed. critica per cura di G. Martellotti, vol. I, Firenze, 1964. 近藤、前掲書。
- (9) Lotario dei Segni, *De contemptu mundi sive de miseria conditionis humanae libri tres*, Paris, 1855, (repr.) Brepolis, 1955. 訳文については、ロタリオ・ディ・セイ『人間の悲惨な境遇について』瀬谷幸男訳(南雲堂・一九九九年)を参照した。
- (10) Giannozzo Manetti, *De dignitate et excellentia hominis*, in *Prosatori Latini del quattrocento*, a cura di E. Garin, Milano-Napoli, 1952, pp. 422-487. 訳文については、佐藤三夫訳編『ルネサンスの人間論——原典翻訳集——』(有信堂高文社・一九八四年・六五—一〇八頁)を参照した。
- (11) Matteo Palmieri, *Della vita civile*, edizione critica a cura di Gino Belloni, Firenze, 1982. 訳文については、近藤恒一『ルネサンス論の試み』(創文社・一九八五年・一五六—一九〇頁)を参照した。

(イタリア思想・市ヶ谷教養教育センター兼任講師)